

プラズマフェレーシスによる維持治療を行った 原発性マクログロブリン血症の1症例

渡部晃久*・加藤 仁*・岩崎道男**・平原 浩**
松村 治*・田村展一*・長澤龍司*
御手洗哲也*・磯田和雄*
埼玉医科大学総合医療センター第四内科*
同人工腎臓部**

76か月に渡りプラズマフェレーシスを施行した原発性マクログロブリン血症の1例を経験したので報告する。症例は、62歳女性で、1987年原発性マクログロブリン血症と診断され、メルファラン、インターフェロン投与が行われたが、骨髄抑制が強く継続治療が困難であった。また、クリオグロブリン血症による血管炎および腎症を合併しており、プラズマフェレーシスが極めて有効であったため、以後2~3週に1度のプラズマフェレーシスによる維持療法を行った。プラズマフェレーシスは、1gM分画を効率よく除去する目的で、再循環法を併用した。二重膜濾過one way法を行った。腎症の進行もなく4年間は安定した状態で経過したが、その後C型肝炎、脾機能亢進症を呈し、消化管出血、肺出血をきたし1993年9月死亡した。一般に治療としては、多発性骨髄腫に準じた化学療法が行われることが多いが、治療成績は満足できるものではない。臓器浸潤が少なく、血中にM蛋白の約80%が存在するとされる本症では、プラズマフェレーシスによる維持療法の有用性が示唆された。

多発性骨髄腫における血漿交換療法について

清水寛夫*・浅田雅美*・荒木俊行**
西伊豆病院透析室*・同泌尿器科**

[対象及び方法] 症例は70歳女性IgG(κ)型、76歳男性IgA(λ)型、83才男性IgA(λ)型の多発性骨髄腫症例に対して化学療法施行するも反応せず、過粘度症候群の増強により、歩行困難となったため、ポアサイズの異なる血漿成分分離器を用いて二重膜濾過血漿交換(DFPP)を施行し、それぞれの症例治療効果を比較検討した。[結果] 多発性骨髄腫の過粘度症候群に対してポアサイズの異なるDFPPを施行し、異常免疫グロブリンのDFPP前後での減少率で有意差を認めた。[結論] 多発性骨髄腫の過粘度症候群に対して有効であり異常免疫グロブリンのDFPP前後での減少率で3症例ともAC1740の血漿成分分離器が優れていた。

悪性関節リウマチに対する長期の血漿交換療法

圓藤通典*・岩崎義彦*・杉 薫*・山下多恵子**
杉山美乃**・久保田設子**
清水館病院*・同透析室**

[目的] 悪性リウマチ(以下MRA)に対して一年以上継続して行った長期の血漿交換療法の効果を明らかにする。[対象] MRAと診断された13症例。男性4例、女性9例で平均60歳。[方法] アフェレーシスは二重濾過血漿交換療法と血漿吸着療法で月に1~2回行った。効果判定は四肢の関節痛や筋肉痛などの自覚症状と免疫学的パラメータで行った。さらにMRAの特徴的な臨床症状である血管炎や神経炎で判定した。[結果] 関節痛や筋肉痛は全症例で改善された。免疫学的パラメータでは血沈値、CRP、白血球数等の炎症反応は改善されていた。RAHA等のリウマトイド因子で高値例は改善されていた。C3d、C1q等の免疫複合体は全例で基準値に低下していた。C3、C4、CH50等の補体価は異常値から基準値に改善されていた。血管炎や神経炎は8例で消失した。[結論] 自覚症状、免疫学的パラメータ、さらに血管炎や神経炎等の臨床症状はアフェレーシスで改善されていた。しかし骨破壊による関節症状は改善されなかった。

慢性関節リウマチ患者に対する血漿交換療法における血漿粘度の変化の違いによる検討

金井美紀・木村秀三・前田伸樹・宮方 了
鈴木信吾・森谷泰和・渡辺 仁・木田一成
山路 健・河西利昭・藤田 新・東名正幸
津田裕士・高崎芳成・橋本博史
順天堂大学医学部膠原病内科

[目的] 慢性関節リウマチ(以下RA)に対し、血漿粘度の正常群と高値群で二重膜濾過血漿交換療法による臨床効果の相違を検討した。[方法] 対象はRA患者18例で、治療前の血漿粘度を正常群と高値群に分け、血漿粘度および臨床症状について治療前後での変化を比較検討した。[結果] 血漿粘度の高値群では正常群よりも治療前後での低下率が有意に高かったが、正常群の値までには低下していなかった。臨床症状ではgrip strength, walking time, joint scoreの改善が血漿粘度の高値群で正常群に比べ著明であった。[結論] RAに対する血漿交換療法において治療前の血漿粘度の高値群では血漿粘度および臨床症状の改善率では高かったが、正常群の値までは改善しておらず、高値群では血漿粘度を指標として、血漿処理量を増加させる必要があると考えられた。